

比較文化会報

June 1988 No.9

事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線 19

発行者 椎野正之
編集者 佐藤幸正

学会十周年

副会長 芳賀 馨

私は今、TACCO TO JACC と表記された一冊のスクラップ・ブックを見ながら書いています。事務局次長・佐藤幸正教授が記録した「第一回学会設立準備委員会報告」(一九七九・二・二七)から「第十回大会プログラム・仮」(一九八八・六・四)に至るまで諸々の資料が収められている。

十年一昔というが、昨年遺囑を迎えた私にとっては、歳月の流れは早すぎる。

『会報七号』(一九八六・六)の「学会設立前夜」と題するエッセイに佐藤事務局次長が次のように述べている。「学会設立の主旨及び経過についての記録は残っておらず、当時どんな相談をされたか分らず困っている。このことについては、……芳賀先生にお聞きしなければならぬ」と考えている。これが、事務局として私に原稿依頼をした所以であろう。

『比較文化研究九号』の編集後記には関西支部長・石黒昭博教授が次のように記している。「……もうひとつは、来年の比較文化学会創設十周年までに十号にこぎつけるために、次号の編集者芳賀馨先生にいろんな面で余裕をもってバトンタッチすることでした。」

本学会事業の三本柱は、「会則」にも明示しているように、一、大会、二、会

報、三、会誌であると私は考える。従って、本稿は、この三点に留意しながら、前記二項目を中心に述べることにする。

一九七四年九月、英米における一年間の文部省在外研究員生活を終えて帰国した私は、当時の勤務校で各方面の協力を得て、矢つぎ早に、「アメリカ研究」

「イギリス研究」「太宰治論」「演劇論」などという総合科目を実現し、仲間と共に総合的研究に基づく授業科目の意義を実感したのである。その間の業績は「ローキヤム太宰治論」(津軽書房)、「パディ・チェイユスキ論」(東北比較文化学会)「ヘレン・ハンフ論纂」(開文社)や英語テキスト発行という形で実を結んだ。学者が、自分の専門領域の研究を深めるのみならず、仲間と共に、ある一つのテーマについて各自の研究を総合すること——これが当時の私の夢であった。従って、本学会設立準備会以前

に、この問題について、私は仲間と長期間、文化の比較・総合という視点から論議を重ねた。学者は、研究成果を学会で発表し、学会誌に掲載し、そして大学生に講義する。(その眼で見ると、このプロセスを経ずに教室でモノをしゃべっている大学教師がその割に多いのは残念なことである。)本学会設立の背景的思想

について私は述べたつもりであるが、その仲間の一人、弘前大学名誉教授・花田隆氏がもうこの世にいないのは、本学会にとっては大きな損失である。

『研究・創刊号』が発行されたのは一九八四・六・一である。学会設立総会が一九七九・六・一六であるから、学会発足後「会誌」発行までに五年もかかっている。創刊号発行にひそむセンチメンタル・ジャーニの詳細について本稿で述べた余裕はないが、福島県立医大生物化学講座教授・森一氏(本学会監事・東北支部長)の会誌発行に寄せた熱情は特筆されるべきものと考えている。そして、その「熱情」は実は「思いやり」という心の優しさに由来するものだったことも、私の嬉しい思い出の一つである。

よい仲間とは無限の力である。

「サロン文化の集い」というニュアンスで発足した本学会が、時間的・空間的広がりと共に、その実質的特質をも兼ね備えながら、今や「日本学術会議」登録の問題を討議するまでに展開して来ている。学会設立前夜、comparative、comprehensive という二つの形容詞の選択について、事務局長・西村清巳教授と熱い議論を交したことも、十年を経た今日、矢張り嬉しい思い出である。佐藤教授の要請に応えるためにも『研究・十号』には、その経緯を特集したいと今私は考えている。

(福島県立医大教授・外国語講座)

「捜しています」

関東支部 植原映子

日本の公共の場所にあるトイレで、待ち方が、ヨーロッパ・アメリカ式(縦一列に並んで待ち、先頭の人がいけば早く空いた Booth に入る)のところがあるでしょうか。

男性の皆さんはご存じかもしれません。コンベンション・ホール、駅、デパートなどでは、数多くトイレがあっても、休憩時間や昼食時など、入る人も一斉です。どうしても列を作って待つこととなります。

日本では、それぞれの扉の前で、列を作って待つという、はなはだ非合理的な、文化的でない待ち方をしなくてはなりません。(たかが二、三分というなかれ。差し迫った場合に、自分より後に来た人が先にトイレに入った時の気持は、経験した人でないとわからないと思います。)もし、一本のロープで、入口が一人通れるくらいにしてあったら、それぞれの扉の前で待たないで、縦一列に行列が作れる筈です。

これは、日本中に広まってよい習慣だと思わしますが、いつまでたってもそうなりません。

経験深い比較文化学会員の諸賢、もし、公共のトイレでヨーロッパ式に待つところがありましたら左記までご一報下さい。

一三七〇 高崎市昭和町五三

新島女子短大 植原まで

関西支部月例研究発表会

関西支部 宇田千春

関西支部では、原則的に月一回開催する月例研究会を中心に活動しています。また、昨年度には「比較文化研究No.9」も発行させて頂き、より多くの会員による活発な活動をめざしています。尚、昨年度各月例研究会の内容は次の通りです。

▼一九八七年十一月七日(梅花短期大学) 研究発表

「日英文学の相違点のいくつかーイギリス文学とその風土を中心に」

梅花短期大学 田中 英雄

「旅の印象ー異文化体験の分析」

梅花短期大学 吉田 究

▼十二月五日(松山商科大学) 研究発表

「Finiteness of Verbs : A Cognitive Approach」

同志社大学大学院 宇田 千春

「メタファーが成立する瞬間」

松山商科大学 高尾 典史

講演

「英和翻訳の盲点」

梅花短期大学 畠中 康男

▼一九八八年一月二三日(同志社大学) 研究発表

「Hemingway の技法ー The Short Happy Life of Francis Macomber の場合」

梅花短期大学 河井 恵子

「伝統文法における文分析について」

梅花短期大学 松原 正行

講演

「文学研究と言語学の接点」

同志社大学 石黒 昭博

▼三月一二日(同志社大学) 研究発表

「Conrad, Under Western Eyes における孤独と信頼」

同志社大学大学院 玉井 久之

「Joyce, Ulysses における Parody」

同志社大学大学院 田村 章

講演

「翻訳ー色は香へん: equivalents を求め」

同志社大学 釜池 進

青森英語談話会活動報告

北東北支部 佐藤憲和

六二年度は外遊された先生方(佐藤和博先生、西村清巳先生、佐藤幸正先生)が多く、例年より活動回数が少なかった。五月一九日(火)「英語教育の盲点」

西村清巳

六月三〇日(火)「ハーディと女性」

佐藤憲和

九月二日(火)「マーティー」テレビと映画ー

小株俊哉

十一月四日(水)「ナルニア物語について」

鈴木恵理子

。「現代英語学要説」

石黒昭博・中井 悟・龍城正明 吉藤京子共著(南雲堂)

本書は英語学を概説し、その必要最低限の知識を効果的に得ることができるようにと編まれた入門書である。特に史的な論述よりも共時的視点に立った記述を中心に据え、しかも基本的事項から最新の研究成果まで盛り込んであるという点は注目すべきである。さらに英文学語学批評との接点にも触れ、日英語の比較研究にも言及していることは興味深く、英文学、英語学を専攻する学生はもちろん、中学・高校で英語を教える方々にも役立つであろう。

早川正信著

「山本有三の世界・比較文学的研究」
山形大学・早川正信教授の研究書が、大阪 和泉書院(昭和六二年・三〇〇円)から発行された。同書は、全国学校図書館協議会の選定図書に指定された。なお山形大学・金山等教授の「山形新聞」掲載書評によると、「早川氏は比較文学的視点からストリンドベリ、シュニッツラ、S ツワイク、H・ヘッセなどの、主としてドイツ作家らと有文学の関係を豊富な資料を駆使して明快に論証し、従来の研究に欠けていた新しい側面を掘り起こしている。」

辻義人「随筆・巢立ち」

本学会顧問・辻義人東北福祉大学教授の随想集が、四月一日付で中央法規出版から出版された。辻教授は昭和五十一年から四年間福島県立医科大学を経て、現職は東北福祉大学社会福祉学部長(理事)である。あとがきによると「古稀を記念して法政大学文学部史学科(通信教育部)を卒業し、文学士ということになった。」「大正中期に始まった私の一生も、残照の中に長い影を落しつつ歩いている自分の姿が見える。文学を解する医師辻教授像の、ほうふつとする随筆は、好評裡に店頭を飾っている (一、〇〇〇円)

江上照彦訳「独身送別会」

本学会顧問、日本放送芸術学会長・江上照彦相模女子大名誉教授による
Paddy Chayefsky, Television Plays
(Simon & Schuster, 1955) の全訳が、「独身送別会」というタイトルで、六月三十日付で社会思想社(現代教養文庫)から出版された。帯に記された山田太一氏の評によると「この江上氏による翻訳は日本TVDドラマ史に残さるべき業績である。」

現在日本で活躍するテレビドラマ作家の多くが、昭和三十二年に翻訳出版された同書(原作の約半分の江上教授訳)に深い影響を受けた事実も特筆に値するが、来春、福島県立医大・芳賀馨教授の編纂する本邦初の本格的チェイエフスキ論集「パティ・チェイエフスキ論集—テレビドラマの原点—」(開文社)の出版が予定されて現在着々と編集業務が進められているだけに、本翻訳書の発行は学術的にも極めて大きな意義を有することに注目したい。(八〇〇円)

「En Passant Par...」佐藤公彦(新潟短大)及びモリス・ジャケ(同客員講師・ブルゴーニュ大学国際フランス語研究センター講師)によるこのテキストは、フランス語の総合テキストとして好評発売中(新潟短大フランス語研究室発行)。近々日本の出版社から発行予定。

近況報告

。私、昭和六十三年三月三十一日をもって郡山女子大学を退職いたしました。宮城県教育委員会、東北女子大学、郡山女子大学等、約三十七年の間仕事を続けることができましたのは、家族の理解と協力の賜物と感謝しております。

食物学を専攻した私は、更に管理栄養士の資格を得て、栄養学の実践について、栄養士養成という形で、私の信念を実現できたことは大変幸せでした。

食物と健康に関する情報の氾濫する中で、多くの教え子達が専門的な知識を基に、職場に於て、家庭に於て、それぞれの立場から人の健康に携わっていることを思いますと、自分の選んだ道が間違いはなかったと満足しております。

弘前、郡山とたくさんさんの知人・友人に恵まれ、快適な生活でしたが、ようやく「ついでの家」を仙台に定め、目下準備中で今秋は転居の予定です。

これからは、私自身の為に食文化に関する研究を進めていきたいと、一人張り切っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

(元郡山女子大教授) 芳賀 文字

。学会発足以来、理事として会の運営に協力させて頂きましたが、昨年四月弘前大学から郷里の大学に転動いたしました。新しい職場で一年が経ったばかりで、早速、教務および就職関係の委員に任せられ、多忙な毎日を送っています。

(武庫川女子大学教授) 宇野 秀夫

第十一回大会(大正大学)

シムボージャム予告

第十一回大会シムボージャムは「文化における普遍性」と決定されたが、この度、各支部より講師が推せんされ本部署務局に報告があった。

司会・椎野正之(大正大学教授・国語学)

講師・西村清巳(弘前大学医療技術短期大学部教授・英語学)

芳賀馨(福島県立医科大学教授・英米文学)

石黒昭博(同志社大学教授・言語学)

司会・講師各氏の発表レジュメは、可能な限り早目に会員各位に届けられる予定である。

生きているケネディ

西村清巳

J・F・ケネディが暗殺されたのは筆者が初めてアメリカに渡って二か月目のことであった。その後二十五年の年月が経ち、大統領もジョンソン、ニクソン、フォード、カーター、レイガンと続いたが、いずれも知名度において、到底ケネディにかなわぬ。

今年も、アメリカの通俗週刊誌『ピープル』の表紙をケネディの顔が飾った。ケネディ大統領の恋人エグズナーが、マフィアのボスとも愛人関係にあったことを告白したという内容である。十数枚の写真を載せ八ページに及ぶ記事であるが、告白自体は特に目新しいものではない。既に十年前程前に『ニュース・ウィーク』誌などがエグズナーに関する疑惑を、同じように写真入りで報じている。今回の記事は二番煎じもいいたところである。興味あるのは、二番煎じの内容でも、ケネディの名が現在でもニュースになるという事実である。

去年の九月からのテネシー大学での客員教授の生活を終えての帰途、筆者はテキサス州のダラスに立ち寄った。これまでに十数回の渡米でも果たせなかったケネディ暗殺の現場を自分の目で確かめるためである。

暗殺現場の近くには、暗殺の場所を地図で示した銅板を埋め込んだメモリアル

があり、オズワルドがケネディをライフルで撃った建て物も当時のままである。建物の六階にある問題の窓を指差したり、頻りにカメラのシャッターを切るのも、筆者のような外国人に限らない。アメリカ人の観光旅行者にとってもケネディ暗殺の場所は目玉商品なのである。

ケネディが今も人々の心に残るのにはいろいろな理由が考えられる。弱冠二十二歳で選出されたアメリカ最年少の大統領。カトリック教徒で初めての大統領。アメリカの若者に自信を与えた行動力。更にはマリリン・モンローとの華やかな関係もその人気に寄与している。

しかし、筆者には、ケネディが人々の心に残るのには彼の暗殺に纏わる謎があるように思える。狙撃者として逮捕されたオズワルドが、報道関係者を含む多くの人の目の前でルビーに殺された事実。ケネディ暗殺の重要目撃者が十数人不思議な死に方をした事実。合衆国最高裁長官ウオーレンが率いる委員会が調査した書類や写真の可成りのものが、当時の大統領ジョンソンの行政命令により公表されないことになった事実。

これらの謎が未解決の間はケネディの魂は浮かばれない。西暦二〇三九年に予定されているウオーレン委員会調査報告書の公表が、これらの謎を解明するまで、ケネディはいつまでも人々の心に生き続けるに違いない。

(弘前大学医療技術短大部教授)

新会員紹介

大村 勇二(北大生・法学)
植村 直美(八戸工大)
チャールズ・アッシュマン(弘前大学院 大・英詩)
森 敏夫(弘前大)
小川美代子(神田外国学院)
北川 弘(滋賀大)
玉井 久之(同志社院生)
杉田トモ子(梅花短大)
吉川 禮三(帝塚山短大)
太田 智子(近畿大附属高校)
釜地 進(同志社大)
松井 泰二(ベークライト商事)
廣岡三智子
木全富美香(梅花短大)
阿部 晃直(神戸市外国語大)
藤田 克則(同志社大院生)
佐野 仁志(寝屋川高校・ドイツ文学)

▲事務局だより▼

総会決議事項

(1)日本比較文化学会は今後「学術研究団体」として、日本学術会議に登録申請の手続きをすべく、準備することになりました。

(2)東北支部は「北東北支部」と「南東北支部」とに分かれ、名称を変更することになりました。

(3)花田隆氏及び鍋島能正氏の死去に伴い、西村清巳及び石黒昭博両氏が副会長になりました。

(4)理事の構成は次の通りです。
会長(椎野) 副会長(芳賀・西村・石黒)
各支部長(奈良岡・森・松井・石黒) 各副支部長(太田敬・畠中) 本部事務局長(佐藤幸) 本部事務局次長(佐藤憲)、その他会長が必要と認められた者(芹田・宇野・山本・小林・藤原)
奈良岡氏の支部長に伴い、監事は藤原氏になりました。

(5)学会費二千円が三千円になりました。ただし、これには支部会費は含まれておりません。

(6)第十一回大会は一九八九年六月三日(土)、大正大学にて開催予定です。なお、シンポジウムのテーマは「文化の普遍性」(三頁下段参)

1 研究発表レジメ

(1)十二月末日必着で事務局まで。
(2)横書四〇〇字詰原稿用紙・B五版(西洋紙半分大) 二枚。

レジメはそのままコピー、製本致しますので、できればワープロ等でタイプした原稿ですと、きれいです。(この場合は八〇〇字で一枚になります)

2 シンポジウムレジメ

(1)及び(2)とも研究発表の場合と同じ。

3 「会報」記事は従来通り三月末日のメ切になります。

4 研究論文集「比較文化研究」については事務局まで問い合わせ下さい(年三回発行)